

話芸で学ぶ道徳教育の教材開発

小泉 博明*・稲田 和浩**

【要旨】日本の伝統文化である話芸に講談がある。講談を学ぶことで、「日本の伝統文化への理解」「言語活動」「道徳教育」が三位一体となって体現することが可能である。また、講談は誰でも気軽に演じられ、アクティブラーニング型授業を実施し、一人ひとりのプレゼンテーション能力が向上し、「主体的、対話的で深い学び」が実現できる。講談には人間の美学を語る側面があり、生きることの素晴らしさや、生きることの意義を問うための素材となるのである。

1. はじめに

話芸のなかでも講談の持っている教育活動への潜在能力（capability）は、驚愕するものがあると確信する。要諦は「日本の伝統文化」「言語活動」「道徳教育」が、三位一体となって体現できるからである。

一つめは「日本の伝統と文化」への理解である。2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機とするだけでなく、インバウンドの増加は瞠目すべきものである。日本のアニメをはじめ、クールジャパンを求めて訪日するが、日本の伝統文化に触れ合う機会もあるだろう。グローバル社会に活躍する人材として、子どもたちが日本の伝統文化を海外へ発信することが必要なのである。

二つめは「言語活動」である。講談を読むことで、子どもの言語活動の発達が見込まれよう。かつての「素読」のように、人前で大きな声で読むことで自信となり、子どもの自己肯定感も高まる。「子が生まれ第一声を親が聞き、親の声を聞きながら子は育ち言葉を覚える。ここに親子の絆が生まれます。日本語のリズムが身体に入ります。言葉の血が流れ、日本の伝統文化を無意識のうちに、懐かしく感じる」¹⁾ ようになる。SNSに依存するのではなく、自分で言葉を発し、諸外国に比較して低いと言われる自己肯定感への意識も高まるであろう。

三つめは「道徳教育」である。講談の素材が道徳教育に資するのである。道徳教育は学校教育全体のなかで行うものであるが、とくに「道徳科」のなかで、日本人が忘れていた人情や義理などが、「読み物」の素材を通して学ぶことができる。黙読は個人的なものであるが、音読は周辺の人たちに共有のものとなる。講談の声の出し方、間の取り方で、聞き手には、まるで映像のように分かるように展開することになる。子どもが一斉に声を出して講談を読めば、講

* 教授／日本思想

** 非常勤講師／日本文化

談を通じて日本語の伝統文化に触れることになるのである。そして何よりも道德心の醸成に繋がるのである。

2. 講談とは

枳台と呼ばれる小机を、張り扇という小さな棒で叩き、拍子を取りながら物語を読む話芸が講談であるが、本来は枳台の上に本を置いて、読み聞かせていた。そして、講談は読みながら、物語の内容を詳しく解説するようになった。それは、書籍が文語体や漢文で書かれたもので、庶民には理解しにくかったので、講談師が分かりやすく、あるいは面白く解説したのである。よって、講談師は講枳師ともいうのである。

読む本は、最初の頃は『太平記』『源平盛衰記』『三河物語』などの軍記物が多かったが、合戦の場面は勇ましく、快活に読まれた。その後、一般的な歴史書や、「金襖物」と呼ばれる政談、「世話物」と呼ばれる一般庶民の人情溢れる話、「怪談」、「武芸物」、「白浪物」(泥棒の話)などが読まれるようになり、分野も広まっていった。話を聴きながら、話の内容を深く知り、楽しみ、どのように人生を生きるべきかを学べるのが講談である。近代になると講談は筆録され、講談本として読まれていた。立川文庫は庶民に人気を博し、娯楽となり、教養となっていた。しかし敗戦後、GHQが軍国主義を一掃するなかで、仇討ち、任侠、忠孝などが禁止され、講談は冬の時代を迎えることとなった。

江戸時代には、いわゆる「学校」は無かった。庶民の子どもは寺院や、寺子屋などで「読み」「書き」などを学んだ。一方、友人と仲良くする方法、目上の人に対する礼儀、最終的には人生いかに生きるべきかなどを物語から学んだ。昔の物語は、寄席という空間で、講談や落語、あるいは心学などから、面白い滑稽な話を聴きながら、楽しく学ぶことができたのである。昔の物語は、現代の私たちの生き方のヒントになるような話も多くある。江戸の庶民は、物語の中から、他人を思いやる気持ち、今で言えば配慮 (care) を学び、生活に活かしていったのである。「情けは人のためならず、めぐりめぐって己がため」という事である。

具体的に道德教育の内容項目に関連する例を挙げるならば、困っている人に手を差し伸べる(「徂徠豆腐」)、喧嘩をしても仲直り(「三方一両損」)、皆をまとめる、リーダーの心構え(「長短槍試合」)、正直に生きよう、心洗われる誠実さ(「細川茶碗屋敷の由来」)、落語では「井戸の茶碗」などがある。

3. 学校現場でどのように活用するか —— 道德教育の視点から

「教育基本法」の第2条(教育の目標)の五には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、(略)」とあり、「日本の伝統と文化」を学ばなければならない。

また、「道德科」の内容では「C主として集団や社会との関わりに関すること」のなかに、「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」の

二つがあり、小学校では一つにまとまっているが、中学校では次のようにいう。「(16) 郷土の伝統と文化を大切に、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。」「(17) 優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家および社会の形成者として、その発展に努めること。」このように「道德科」の内容項目のなかに「優れた伝統の継承」「日本人としての自覚」とあり、この文言からも「日本の伝統文化」を学ぶことが肝要であり、話芸を通じて教材を工夫すれば、その目標が到達できよう。郷土学習を土台に深化することで、日本人としての自覚をもち、優れた伝統の継承者を培うことが可能となろう。

能楽や歌舞伎は演ずることは困難であるが、講談は誰でも気軽に演ずることができる。そこでアクティブラーニング型授業が可能であり、一人ひとりのプレゼンテーション能力が向上し、まさに「主体的、対話的で深い学び」が実現できるのである。従来演目を読むことも大切であるが、学校の郷土にある民話を発掘し、講談仕立てにつくり読むこともできる。あるいは、郷土の偉人を取り上げて講談にすることもできるのである。

講談に登場する人物には、天下の政道を説く人もいるが、人情に篤い人、正義を貫こうとする人、信念を持っている人、貧乏暮らしに耐え志を持っている人など、個性豊かなさまざまな人々が登場する。これからの人生は楽しいことばかりではない。

「人生百年時代」を迎える子どもにとって、人生で苦しいことや悲しいこともあるだろう。その人物の生き方や生き様を手掛かりにして、これからの自分の生き方を考えることができる。講談には人間の美学を語る側面がある。さらに言えば、生きることの素晴らしさや、生きることの意義を問うための素材となるのである。

4. 教材開発の事例

講談のネタ数は約五千とも、それ以上とも言われている。ここでは、道德教材として活かすことが可能な講談の題材をいくつか紹介する。

題材の中には、「^{きょうかく}侠客伝」(親分子分の関係で結ばれている人の話) や「白浪もの」(泥棒の話) などのように、道德教育に合わないものもある。しかし、多くは「人間の信義」「生き方」、世情なら「親子」「夫婦」などの愛、「友情」など人間関係の在り方生き方をテーマにしている。それらは現代の道德とは意味が違う場合(忠君や滅私奉公、自己犠牲など)もあるが、現代の道德の意味を考える契機にはなる。

例えば、『忠臣蔵』でおなじみ『赤穂義士伝』は主君への忠義のため、一心に働く義士たちの物語であると同時に、家族や友人たちを犠牲にして仇討ちをなしとげることに対して、義士と呼ばれた人たちの心の葛藤も描かれる。あるいは家族や友人のために仇討ちに参加しなかった人の物語も描かれたりする。仇討ちに参加しなかった人たちを「不忠」と呼んだりもするが、彼らの物語にこそ、人間の生き方としての真実が語られる場合もある。

また、講談は歴史を題材にしているが、史実とは異なるものが多い。あくまでも物語である。

「講談師 見てきたように 嘘を言い」である。物語と歴史の違い、物語ゆえの面白さがあることを、授業で子どもに注意すべき点であることを付け加える。

事例1 「徂徠豆腐」

(あらすじ)

江戸中期の儒学者、荻生徂徠は若き日、貧乏であった。食べるものもなかった。蔵書売って金に替えればよかろうと言う人もいたが、学者にとっての本は武士の刀と同じ、本を売っては学者の信義に反すると、本を売ってはなかった。

徂徠は豆腐屋から代金を借りて、毎日豆腐を食べていた。人情味のある豆腐屋は飯をご馳走しようと言うが、飯をもらえば施しを受けることになる、商品の豆腐なら、いずれ代金を払えばよいと言う。豆腐屋は、「なら、おからをお食べなさい」と、安価で腹にたまる、おからを炊いて、徂徠の家に届けた。

やがて、徂徠は柳沢吉保に認められ、儒学者として幕府に仕えるようになった。世話になった豆腐屋が火事に遭って焼け出されたおり、徂徠はおからの礼だと、新しい家を建てて恩返しをした。

(解説)

荻生徂徠は実在の人物。困っている人がいたら、手をさしのべる人情味あふれる豆腐屋との心温まる交流が描かれる。

(教材のポイント)

- ① 人が困っていたら、どうやって助けたらよいのか。
- ② 金銭や食糧を支援するだけでいいのか、その人が何を必要としているのかを考えねばならないのではないか。
- ③ 困っているときに助けてもらった人に対する恩返しの意味。

事例2 「細川の茶碗屋敷」

(あらすじ)

屑屋の清兵衛は正直者で知られていた。ある日、長屋の浪人、千代田^{ぼくさい}卜齋より仏像を買い、細川家の臣、高木作左衛門に売った。高木が仏像を磨いていると、台座の紙が剥がれて仏像の腹の中より黄金が出た。高木は仏像を買ったが、中の黄金は買ってない。千代田は経済的に困っているだろうからと黄金を返すと言う。千代田は売ったものを返してもらう^{ゆえん}所以はないと言い、二人は口論となる。清兵衛と卜齋の家の大家が間に入り、黄金を半分に分けることで話がつく。

卜齋は高木に礼として湯呑茶碗を贈る。これが高麗の井戸の茶碗という名器であることが知れる。高木は茶碗を返すと言うので、また揉め事になるところ、千代田の娘を高木のもとに嫁がせることで話がまとまる。高木は茶碗を細川侯に献上した。細川侯は高木と千代田の清廉さ

を褒め、高木を加増した。(人物の名前は演者により異なる)

(解説)

出て来る人物は皆、清廉で金銭に無頓着である。というのも江戸時代は身分にあった暮らしをしていたため余分な金銭は必要なかった。千代田ト斎は浪人であったため困窮したが、他の者は収入に応じた暮らしをしていた。金持ちでなくても、必要以上の金銭はいらず、困っている人に、あるいは、本来あるべきところに金銭がゆくべきであるというのが、一般的な考え方なのである。

(教材のポイント)

- ① お金の意味を考えてみよう。
- ② 正直の意味を考えてみよう。
- ③ でも、少しはお金が欲しいのでは。そういう心も人間にはあるだろう。

事例3「太閤記、長短槍試合」

(あらすじ)

豊臣秀吉が木下藤吉郎を名乗っていた若き日のお話である。藤吉郎は織田信長の家来だった。信長がある日、槍は長いものと短いもの、どちらが戦場で役に立つのかと家来たちに聞いた。槍術指南(槍の先生)の上島主水は短い槍が役に立つと言う。ところが、藤吉郎は長い槍のほうが役に立つと言う。信長はそれぞれ足軽五十人を率いて試合をし、長い槍と短い槍、どちらが役に立つか勝負をしようと言う。試合は三日後、上島は五十人に槍の特訓をはじめめる。

一方の藤吉郎は五十人を家に呼び、ご馳走をし、槍の練習もせず宴会をはじめめる。藤吉郎の配下になった足軽たちは、藤吉郎を信頼し、また仲間同士の連帯感が生まれ、藤吉郎の支持通りに動く。上島の配下は三日間の特訓で全員くたくたになっていた。五十人による長い槍での離れたところからの攻撃に、上島隊は負けてしまい、主水は夜逃げをする。

(解説)

織田信長は早くから長槍軍団を組織し合戦に活用していた。藤吉郎の「長短槍試合」のエピソードはまったくのフィクションである。しかし、足軽から関白(太閤)にまで出世をした秀吉は、部下や仲間の心を惹きつけるために、労力を駆使したことはうかがわれる。人から信頼を得るためにはどうしたらよいかを教えてくれる物語である。

(教材のポイント)

- ① 部下に厳しく接する上島と、部下と仲間意識を強めてゆく秀吉と、それぞれの指導方法を比較してみよう。
- ② リーダーシップとは何かを考えてみよう。

他にも、『大岡政談』では、法律だけでは解決出来ない、人々が幸福に暮らすにはどうしたらよいか、裁きの場で描かれている。現代のコンプライアンス重視の考え方からすれば聞

違っているのだが、「大岡裁き」と呼ばれる人情味の物語の意味は、ルールでは割り切れない「道徳」の意味を考えることが出来る。

また、いわゆる講談のテクニックである「修羅場読み」や「会話」「地語り」などの技術は、リズムカルな話や、内容を美しく正しく伝えるための、言葉の技術、話し方の習得にもおおいに役立つのである。

5. まとめ

国語科では、話芸の落語がすでに教材として取り上げられている。また、教科内で「創作」という学習内容もある。講談の教材化は道徳科だけではなく、国語科においても可能である。

なお、本学において、2019年2月16日（土）に「第1回 日本の伝統文化を考える道徳セミナー」を開催し、小・中学校の実践事例の紹介とシンポジウムを実施した。継続して、年に一回はセミナーを開催する予定である。今後の展開としては、実践事例数を増やし、事例研究を実施し、課題を見つけ改善し、多くの学校で広がることを期待する。組織的な学校寄席の運用も包摂した「日本講談教育研究会」の設立へ向けて一歩でも前進したい。

注

- 1) 宝井琴星監修・稲田和浩・小泉博明・宝井琴柑（2018）『おやこで楽しむ講談入門』p.4、彩流社

参考文献

- 宝井琴星監修・稲田和浩・小泉博明・宝井琴柑（2018）『おやこで楽しむ講談入門』彩流社。
小泉博明「話芸（講談）で学ぶ、日本の伝統と文化 言語活動から道徳教育へ」（2019）「道徳ジャーナル」100号、学研教育みらい。

(2019.9.25 受稿, 2019.10.25 受理)